

ラディン語ならびにロマンシュ語母語教育の現状と課題

La lingua ladina e la lingua romancia : attuali metodi di insegnamento e problematiche relative

山田 敏 弘
YAMADA Toshihiro
lingua@gifu-u.ac.jp

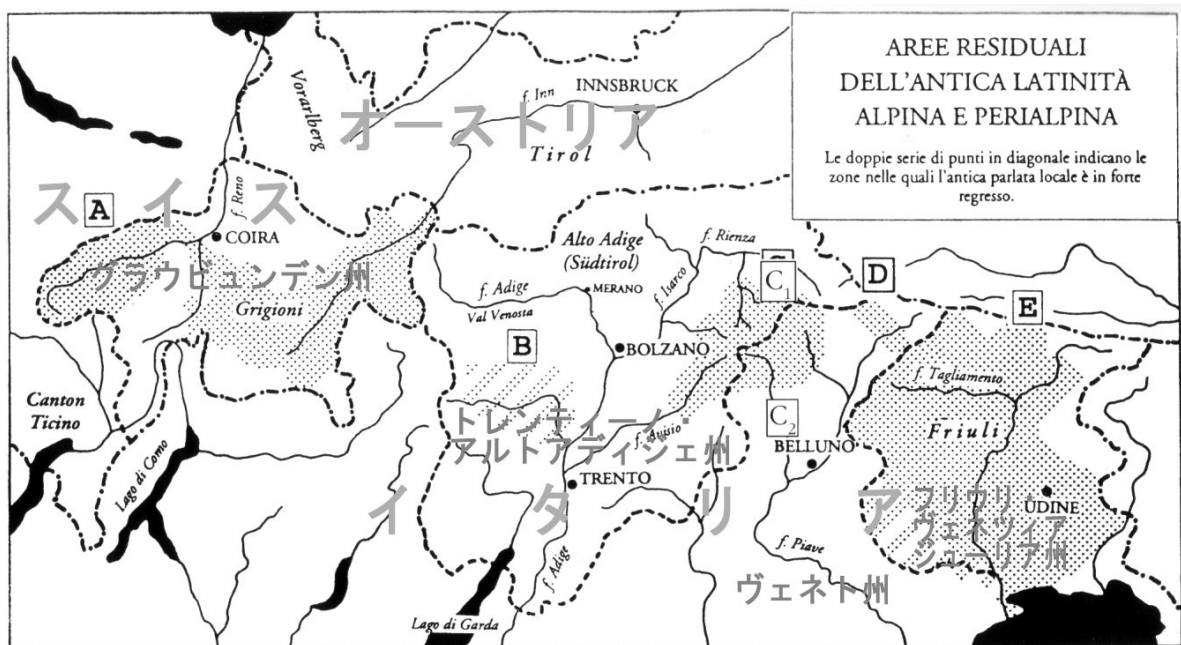
1. はじめに

前稿山田 (2008) で報告したフリウリ語母語教育の現状と課題の報告・考察に続き、本稿では、ラディン語 (*it.*¹ *ladino*, *la.* *ladin de la dolomites*) およびロマンシュ語 (*ru.* *rumantsch*, *de.* *Romanisch*, *it.* *romancio*) の母語教育の現状と課題について、2008年4月から6月にかけておこなった調査をもとに報告し、課題を考察する。

すでに、前稿でも見たレトロロマンス語全体の言語系統的な位置付けを、ラディン語とロマンシュ語を中心に振り返り、ラディン語とロマンシュ語の言語特徴を特に地理的側面から描いた上で、言語の現状、教育および教師教育、それぞれの側面から課題を考えながら、最後に少数言語の保護と教育を日本の事例と比較して考察する。

2. レトロロマンス語 3 言語の特徴

レトロロマンス語 3 言語は、イタリアならびにスイスで話されるロマンス語の 1 種である。およその分布域は、次の通りである。



地図 1 レトロロマンス語の分布 Belardi (2005:17) に加筆

¹ de. ドイツ語, en. 英語, fr. フランス語, fu. フリウリ語, la. ラディン語, ru. ロマンシュ語。

Florentin Lutz (1982) およびLia Rumantscha (2004:13) によれば、レトロロマンス語は、次のように系統立てられる (表記については、Gordon ed. (2005) なども参照)。

I ロマンシュ語 (*ru.* rumantsch, *de.* Romanisch, *it.* romancio, *fr.* romanche, *en.* Swiss Romansh)

- | | | |
|-------------------------|---|---|
| 1) スルシルヴァ方言 (Sursilvan) | } | ルマンチュ・グリシュン (標準語)
(<i>ru.</i> Rumantsch Grischun) |
| 2) ストシルヴァ方言 (Sutsilvan) | | |
| 3) スルミラン方言 (Surmiran) | | |
| 4) ピュテール方言 (Puter) | | |
| 5) ヴァラーデル方言 (Vallader) | | |

II ドロミティラディン語 (*la.* ladin de la Dolomites, *it.* ladino (dolomitico), *de.* Ladinische)²

- 1) ガルデーナ (*la.* Gherdëina, *it.* Gardena, *de.* Grödnertal) 方言
- 2) フォドム (Fodom) 方言
- 3) ファッシャ (*it.* Fassa, *la.* Fascia) 方言
- 4) バディア渓谷 (Val Badia) 方言

III フリウリ語 (*fu.* Furlan, *it.* Friulano, *en.* Friulian)

主に言語圏として、イタリア語とドイツ語に囲まれた地域に存在するこれらの言語は、その名称自体、何語で語るべきかがまず問題となる。なぜならば、レトロロマンス語の問題点が、レトロロマンス語自体で語られることは少なく、そのため、名称としても、イタリア語やドイツ語での名称が一般的であるからである。また、スイスの公用語であるフランス語で書かれた文献もあり、名称は様々な用いられる。さらには、谷ごとで異なる綴りで表されることもあり、問題はさらに複雑である。ここでは、地名を、その所属する国家でもっとも優勢な言語で表すことで統一しておく。すなわち、スイスではドイツ語による地名を、イタリアでは (ラディン語地域がドイツ語圏に属するものも含むことは承知の上で) イタリア語による地名を優先し、その音をカタカナで表記することとし、添えて現地名や関連言語で表していくという方法を採用する。

言語の名称に関しても、いささか複雑である。ラディン語 (ladinoあるいはladin) という名称は、スイスのロマンシュ語の一方方言を指す名称としても、また、イタリア国内とトレンティーノ・アルトアディジェ州 (Trentino-Alto Adige) 等で話される言語の総称として用いられることもある。ここでは、ラディン語というのは、あくまでドロミティラディン語を指すものとして用いる。

また、ドロミティラディン語は、カドーレ方言 (Cadorino) とコメリコ方言 (Comelico: 地図1のD) を含めず、第一次世界大戦までのオーストリア領のものに限定して用いられる場合もある (Lia Rumantscha 2004:14, Verra ed. 2000:10-11など)。この点は後述する。

レトロロマンス語の言語的特徴として、3言語を括ることができる特徴は次のようなものである。

- 豊富な二重母音化現象を有する。特に、俗ラテン語の狭母音のeは、eiやeaになるなど、イタリア語のieへの変化やフランス語のoiへの変化などは、区別されるに相当の違いを呈する。
- 子音に関しては、cやgの母音aの前での口蓋化現象が見られる。これはイタリア語には見られない現象で、一方、フランス語のような摩擦音化はしておらず、基本的に破擦音である。
- 名詞や形容詞の複数接辞がsである。イタリア語ではラテン語複数主格に由来する末尾母音の変化によって複数表される。
- 動詞の二人称単数形が、ラテン語から引き継がれたsによって終わる。イタリア語では、母音iへと変化している。

² Belardi (2005:15) には、Bの地域として、ノーン谷 (Valle di Non) とソーレ谷 (Valle di Sole) で、それぞれAnaunicoとSolandroというラディン語の方言が話されているとの報告がある。今回、この地域は調査の対象としておらず詳細も不明であるため、ここでは扱わない。

これらの特徴から、明確に隣接するイタリア語はもとより、同じ西ロマンス語のフランス語からも分離され、一つの言語として考えられている。ただし、ロマンシュ語とドロミティラディン語の谷ごとの発音の差は小さくなく、表記法もそれぞれ異なっている。一例を挙げれば、同じ口蓋化音の「チャ」に相当する発音も、(実際の発音が少しづつ違うこともあり)、ロマンシュ語でtgやtschを子音として用いるほか、ドロミティラディン語では、イタリア語的にciと表記されるなど、様々である。中にはëのような表記法を用いる場合もあるが、ドロミティラディン語ではドイツ語のようなウムラウトではなく、広母音のeであるなど紛らわしいものもある。具体的な音声³については、今措くとして、本稿では現地で採用されている表記に拠ることを断っておく。

言語であるか否かは、言語特徴だけで決まるわけではない。スイスのロマンシュ語が、スイス国内での言語としての地位を獲得したのは、1932年であるが、これは、ファシズムの台頭を阻む目的があったとされている。スイス国内の人口比1%にも満たないこの言語の正式な地位が認められたのが、政治的な目的であったことは、あまりにも有名な事実である。

一方のイタリア国内の状況は、フリウリ語について前稿で報告したとおり、それよりも半世紀ほど後になってから進展した。国境という壁に隔てられた当該3言語(方言)は、ひとつの進展をしてきたわけでもなく、また、イタリア国内のドロミティラディン語とフリウリ語ですら、別々に言語政策が執られてきたのである。詳細については、順に、3節と4節で見ていくが、このような地理的に分断された言語、さらに分断されたからこそそれぞれの話者人口が少数派であることが、言語教育に違いを生じてきたことは明らかである。本考察の最大のポイントは、このような、言語学的に類似した特徴を持つ一方で、地域的に分断され話者人口としてまとまりを欠く言語が、どのように、そしてどのような目的において教育されていくかを見ることにある。

最後に話者人口を、Lia Rumantscha (2004:14) にしたがって挙げておくと、スイスのロマンシュ語は60,000人、ドロミティラディン語は30,000人、フリウリ語は500,000人である。この話者人口に関しては後述する。

3. ドロミティラディン語の現状と教育

3.1 ドロミティラディン語の地理的問題

少数言語が残っている地域とは、どのような特徴を持った地域であるか。日本でも古来、本居宣長が『玉勝間』に古いことばは田舎に多いと述べたように、辺鄙な場所であるからこそ少数言語もその命脈を保つことができることが少なくない。しかしながら、ドロミティラディン語に関しては、この辺鄙な場所ということが、ひとつの大きな問題を生じている鍵となっている。

それは、この言語が大きな山塊を背に寄り集まっていることであり、その山塊が同時に州境となっていることで



<http://it.wikipedia.org/wiki/File:Ladina-towns.gif>に加筆

地図2 ドロミティラディン語の分布

³ ザルツブルク大学Franz GöblらによるALD (*la. Atlant linguistisch dl ladin dolomitich y di dialec vejins, de. Sprachatlas des Dolomitenladinischen und angrenzender Dialekte*) のホームページ (<http://ald.sbg.ac.at/ald/ald-i/index.php>: 2009年1月1日現在) で聞くことができる。

ある。前ページの地図2は、それをもっともわかりやすく示している。

今回、ここに挙げられている地域を実際に訪れたが、AnpezoとFodomと書かれている地区は、ヴェネト (Veneto) 州である。州都ベネツィア (Venezia) から、リゾートとしても有名なコルティナー・ダンペッツォ (Cortina d'Ampezzo) までは、電車で2時間半、そしてドロミティバス (Dolomitibus) に乗り継ぎ1時間ほどかかる。一方、北側のGherdëina地区と、Val Badia地区は、トレンティーノ・アルトアディジェ特別州 (Trentino-Alto Adige) であり、州都ボルツァーノ (*it.* Bolzano, *de.* Bozen) からのアクセスもそれほど悪くない。南のFasciaとある地区も、県の違いはあっても同じトレンティーノ・アルトアディジェ州である。つまり、このドロミティ (Dolomiti) の山塊を背にして集まる5つのドロミティラディン語を話す地域は、2つの州に分断されているのである。

現在でも、それぞれの地域を繋ぐバスの便もあるが、かなりの急な峠を越えなければならない。また、バス会社も州によって異なっている。さらに、バディア溪谷 (Val Badia) の北端マレッベ (Marebbe) からコルティナー・ダンペッツォへは自動車乗り入れ禁止の自然遊歩道しか通じていないなど、頻繁な交流が可能であるとはいいいにくい自然条件である。

このような自然的・人為的な分断によって生じているのが、このラディン語に関するセンターが、複数存在するという事実である。日本でドロミティラディン語についてインターネットで検索すると、ま



写真1 Borca di CadoreにあるIstitut Ladin de la Dolomites

ず行き当たるのが、ドロミティラディン語会館 (Istitut Ladin de la Dolomites) である (<http://www.istitutoladino.it/>)。これは、コルティナー・ダンペッツォよりも南に25分ほどのところにあるボルカ・ディ・カドーレ (Borca di Cadore) という小村にあるセンターであるが、ある建物に間借りをした広さ12畳ほどの部屋が2つだけのセンターである (1つはオフィス、1つは図書室として用いられている)。館員は、訪問時2名であった。

一方、ガルデーナ地区とバディア溪谷にあるのが、ミクラ・デ・リュラ



写真2 San Martin de TorにあるIstitut Ladin Micurà de Rü(右) およびラディン語、ドイツ語、イタリア語による地名表示(上)



ディン会館 (Istituto Ladin Micurà de Rü) である。こちらは、比較的大きなセンターである。もちろん、ホームページもある (<http://www.micura.it/>)。2008年、バディア溪谷の小さな村サン・マルティン (San Martin de Tor) に立派な講堂を備えたセンターがオープンし、その支部であるガルデーナのセルヴァ (*la. Sëlva, it. Selva*) にも図書室を備えた独自の施設をもつ。また、州都ボルツァーノにあるラディン語教育研究所 (Istitut Pedagogich Ladin) とも連携を緊密に取っている。

このように、少なくとも2つのラディン語センターが存在することは、やはり州の違いによる部分が大い。

さらに事態を複雑にしているのが、第一次世界大戦までの旧国境である。上記地図2に載せてある「ラディン語地域」は、旧オーストリア領の南チロールと呼ばれた地域だけを取り上げてある。同じ州の中にあってもコルティーナ・ダンペッツォは旧オーストリア領で、カドーレ (Cadore) 地区とは違うとされている (このため、ラディン語はカドーレにおける言語を含まないこともある)。つまり、現代における州の境界と、今から80年も前の旧国境が、この言語を分断しているのである。

日本でも、旧国境は、自然要因とも重なり言語的な特徴の差となることがある。青森県では旧津軽藩と旧南部藩との言語差も大きいとされているように、150年近く経っても言語境界になっていることもある。このことを考えれば、たかだか前世紀のことである。言語の差は無視できないものなのであろう。しかし、このことが言語自体の差に留まらず、さまざまな差へとつながっている。次節以降で見ていく。

3.2 ドロミティラディン語の現状

ドロミティラディン語の話者に関する統計は、いささか古い資料になるが、Rifesser (1994) で、バディア溪谷およびガルデーナ地区を合わせて、およそ、17,000人弱である。ガルデーナ地区でもっとも大きな村であるオルティゼイ (*it. Ortisei*) でも人口わずか4,000人ほどであるから、いかに谷の人口規模が小さなものであるかがよくわかる。一方、Eicher Clere (2004) によれば、ヴェネト州ベッルーノ (Belluno) 県では、2001年の調査で、39の自治体に60,000人が住むとされるが、言語話者の数は把握できない。また、ファッシャ (Fascia) 地区については、言語話者の統計に行き当たらなかった。このような統一的な言語話者に関する統計がないことも、州の分断のひとつの弊害なのであろう。とりあえず、Gordon ed. (2005) (=Ethnologue第15版) によって、話者人口は総計30,000というところが妥当な話者人口数であろう。



写真3 Canazei (左)、Selva(中)、San Martin de Tor (右) の家の表示

言語自体の違いはどうか。写真3に示したように、隣の谷でも語彙の違いは小さくない。「家」は、写真に示してあるとおり、ファッシャ方言でCesa, ガルデーナ方言でCësa, バディア溪谷方言で

Ciasaである。また、Siller-Runggaldier (2000) によれば、音の違いに加えて文法的な違いも大きい。たとえば、ファッシャ、フォドム (Fodom), アンペゾ (Anpezo) 方言においては、イタリア語と同様、noあるいはnonという否定辞を動詞の前に置くだけでよいが、ガルデーナ方言とバディア溪谷方言においては、ne … niaという接周辞 (circumfix) によって、動詞をくるまなければならない。Siller-Runggaldier (2000:35) から引用して示す (太字は原文)。

- (1) Non li ho visti (イタリア語=私は、彼等を見ていない。)
- | | |
|--------------------------------------|-------------------------------|
| Le ne n' i é nia udui. | ガルデーナ方言 |
| Iö ne i à nia udü. | バディア溪谷方言 |
| Ge no i é vedui. | ファッシャ方言 |
| No i è vedus. | フォドム方言 (リヴィナロンゴ Livinallongo) |
| I non èi vedude. | アンペゾ方言 |

このような話者人口の少なさと言語の多様さにもかかわらず、2008年5月の調査でも感じたことであるが、域内のラディン語に対する使用はかなり強固である。それがもっとも強く感じられたのは、この地域の人々がイタリア語を流暢に話さず、強いラディン語アクセントまじりのイタリア語を話していたことであった。もちろん、トレンティーノ・アルトアディジェ州は、第二次世界大戦後イタリア領となった地域で、ドイツ語では南チロル (Südtirol), つまり、オーストリアのチロル地方に続くドイツ語圏である。もとよりイタリア語は、州内での第二言語、つまり、ラディン語話者にとっては、第三言語であることも忘れてはならない。Rifessor (1994:19) では、学齢期に達する以前に三言語併用になる率は、もっとも高いSelva地区で30%を超えるとされている。若い世代では、確実にラディン語も、ドイツ語も、そしてイタリア語も、一見、流暢に操れる人が増えているのである (この問題については5節でまとめて述べる)。

マスコミの状況としては、オルティゼイ (Ortisei) に拠点を置く新聞 “La Usc di Ladins” (ラディンの声) が、週刊で発行されている。日本の新聞の半分ほどのタブロイド判とはいえ、総カラーの36ページ (2008年4月26日号) というページ数はなかなか読み応えがある。ただし、このページ数の多さには、理由がある。それは、それぞれの方言で記事が書かれていることである。たとえば、同号で言えば、7ページ目からオルティゼイのあるガルデーナ地区の記事が4ページ載る。続いて、バディア溪谷のニュースが6ページ、ファッシャが4ページ、フォドムが2ページ、アンペゾが2ページ載せられている。特筆すべきは、これら



写真4a ボルツァーノの新聞：左下のドイツ語新聞、右側のイタリア語新聞と並んでラディン語新聞が見える

の記事がそれぞれの言語で書かれていることである。とはいっても、相互にわからないほどではない。イタリア語の知識でもある程度は読むことができる。一方、違いも明確にあり、共通して拾えることばを見ても、「4月」は、ガルデーナ方言でauril, バディア溪谷方言でauri, ファッシャ方言ではoril, フォドム方言でauril, アンペゾ方言でaprileとなっている。



写真4b La Usc di Ladins
(ラディンの声) 2008年16号

記事に関しては、「谷を結ぶトンネルが掘られる」などという重大ニュースは稀で、ほとんどが日本の新聞の地域版のようなものである。興味深いことに、ガルデーナのページにはクロスワードパズルがあった。クロスワードパズルは、正書法があってはじめて成り立つゲームであり、このゲームがあるということは、単なる話しことば言語ではなく、たとえ、それが発音を写したものであるにしても書記法が定まっていることを示している。

では、共通語を模索する動きはないかという点、Guglielmi (2004:42) に、SPELL (Servizio per la pianificazione e l'elaborazione della lingua ladina: ラディン語標準語計画策定事業) が、人工の共通語として、ladin dolomitànを制定しようとする動きを見せているとの報告が見える。しかし、このような共通語化には否定的な意見も聞かれ、Micurà de RùのLeander Moroder(p.c.) は、共通語制定によって人々の話すことばから離れてしまい、かえって言語としての衰退を招くとの危惧を語った。どれくらいの違いがあるかにもよるであろうし、また、現在のような2つの州にまたがった分布をしている以上、我田引水に陥らないとも限らない。実際、ヴェネト州側からは、特別州にもなっているトレンティーノ・アルトアディジェ州の言語政策は、資金的にも優遇されていると見えるためか、やや距離を置いているとも取れる発言も聞かれた。右はトレンティーノ・アルトアディジェ州の施設における図書であるが、蔵書数にしても、その歴史的な積み重ねにしても、やはりヴェネト州のものを凌駕する。共通語制定はそれほど容易なことではないのが実情である。



写真5 Micurà de Rù (Selva) の図書館
各地の方言集など貴重な資料が並ぶ

ドロミティ地方におけるテレビやラジオ放送についての調査はおこなえなかったが、現在ではインターネットによる発信が大きな比重を占めているとの考えを述べてくれたのは、前述のMicurà de RùのLeander Moroderである。Micurà de Rùのセルヴァ事務局には、コンピュータが何台もあり、定期的な発信をしているとの話も聞いた (<http://www.micura.it/>)。欲しい人に欲しい情報を届けることが、この時代の少数言語発信に合っているであろう。

3.3 ドロミティラディン語の教育

次に、ドロミティラディン語の教育について見ていく。

Rifesser (1994:10-11) によると、第一次世界大戦以前、トレンティーノ・アルトアディジェ州およびヴェネト州のアンペゾ地域はオーストリア領で、基本的な教育はドイツ語でおこなわれていたが、ラディン語の教育も、谷ではそばそと続けられていたという記録が残っている。第一次大戦以降、南チロル、つまり現在のアルトアディジェ (Alto Adige) 地方は、イタリアに併合されることになるが、奇妙なことに、ここでラディン語による教育は廃止され、短い間ではあったが、すべてドイツ語で教育がおこなわれるようになった。その後、1921年から1943年までは、イタリアの一部としてイタリア語で教育がおこなわれるようになり、イタリアのファシズム政権によるこの地の統治が及ばなくなった1943年から5年間は、180度方針転換してすべてドイツ語での教育に置き換えられた。まるで、ア

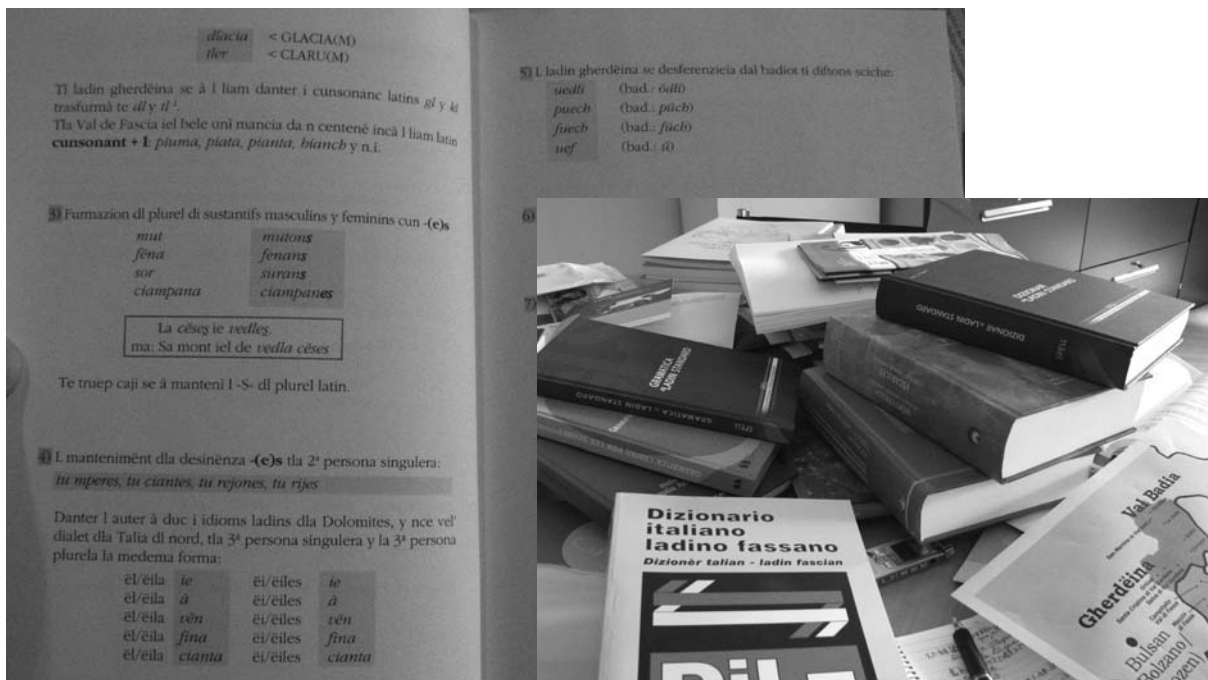


写真6 ドロミティラディン語の文法書等の書籍

ルフォンス・ドーデによるアルザス地方の「最後の授業La Dernière Classe」さながらの言語政策の変換が二度にわたって、当地ではおこなわれたのである。

現在の体制が固まったのは、意外と早く1948年で、以来、ラディン語も含む三言語による教育が、この特別自治州の基本となっている。しかし、すべての言語が平等に教えられているというわけではない。Rifesser (1994:20) によれば、小学校一年生では、基本をドイツ語かイタリア語のどちらかで教え、必要に応じラディン語を手段として用いるという教育がなされている。その後、二年生からは、イタリア語とドイツ語は平等に時間数を分け合うが、ラディン語の授業は、イタリア語・ドイツ語両方を合わせた時間の1割以下とわずかな時間しか割れない。さらに近年では、英語教育が入ってきて、Lois Ellecosta ed. (2007) によると、小学校では、週16時間ずつの割合でイタリア語とドイツ語で授業をおこない、2時間ずつをラディン語と英語でおこなうという状況になっている。

上で「割合で」と書いたのには訳がある。Rifesser (2007) によると、オルティゼイ (Ortisei) の小学校では、あまりに使用言語が変わり続けることを避け、次のような二週間単位での言語政策をおこなっているとの報告がある (同報告には、特に何年生とは書かれていない)。

第1週	月	火	水	木	金	土
1	算数	独語	独語	宗教	独語	独語
2	独語	独語	独語	歴史	算数	算数
休み						
3	独語	選択	ラ語	算数	英語	体育
4	英語	算数	音楽	地理	理科	ラ語
昼休み						
1		宗教				
2		映像				

第2週	月	火	水	木	金	土
1	算数	伊語	伊語	宗教	伊語	ラ語
2	英語	伊語	伊語	伊語	算数	算数
休み						
3	ラ語	選択	伊語	算数	英語	体育
4	音楽	算数	歴史	地理	理科	伊語
昼休み						
1		宗教				
2		映像				

(Rifesser 2007:22より)

第1週は、ドイツ語（独語）と書いた時間以外の、算数、歴史、地理、理科、音楽、体育も、すべて授業はドイツ語でおこなわれる。逆に、第2週は、それらがすべてイタリア語に置き換わる。「ラ語」と記したラディン語と英語は、それぞれラディン語と英語でおこなわれるが、宗教だけは、独伊ラ語からの選択が可能で、選択の授業もドイツ語かイタリア語かの選択が許されている。

このような、州全体でおこなわれている完全な2言語平等政策 (parità) の上に、ラディン語教育をおこなうという方式を採っているため、きわめて言語教育の時間が多く取られていることも、このカリキュラムの特徴である。

教育の効果はどうかと言うと、これは、Rifesser (p.c.) によれば、「ほぼ、完全な二言語併用、あるいは三言語併用が実現している」とのことである。実際、ラディン語教育研究所 (Istituto Pedagogico Ladin) にRifesser氏を訪ねたとき、彼は、完璧なイタリア語を話していたし、同時に電話ではドイツ語を、同僚とはラディン語をまったく自然に切り替えて会話していた。すべての人にとって、同等の力の付く教育となっているかまでは調査することはできなかったが、ラディン語地域で話を聞いた数名に限って言えば、おそらく戦前に教育を受けたであろう年配の人は、イタリア語にはやや訛りがあったが、若い人は、完全な二言語（イタリア語とラディン語）併用であったことは、個人的にも確かめられている。この成果もあってか、若い人の中には、ミラノのようにイタリア国内の都会に出て職を探す人もいるし、逆に、隣接するスイスやオーストリアに自由に活動範囲に入れている人も、実際にいた。おそらく、さらにはドイツであっても、彼等にとって言語の壁はないに等しいであろう。

一方、少数言語話者であるという点はどうか。これは、伝聞に過ぎないが、ミラノに住むラディン語話者は、仕事でイタリア語を話し、外国人の妻とは英語で話し、自分の息子とはラディン語で話すという。故郷を離れていても、少数言語話者であるという事実は、家族に受け継がれていっている。この点、日本では類例が思い当たらない。都会に出た地方出身者は、電話で故郷の人と話するとき以外は、家族であっても母語である地方語を使わないのが普通であろう。家の中で、息子や娘であっても、

地方語で話そうとすれば、息子や娘からは低い評価を受ける。日本では地域言語に対する評価は未だ低いままである。そこには、日本の長年にわたる多様な言語資産を活かせていない現状がいかにも不幸なものであるかが見え隠れする。上記ラディン語話者の場合が特例的な位置付けという可能性はなくてもないが、それでも、多言語併用と同時に母語の伝承をも確実にこなっている点は、外国語教育を含めた表層的な言語教育全般をおこなっている日本にとっても、(言語教育の時間的充実も含めて)非常に参考となる事例である。

3.4 ドロミティラディン語の教育をおこなうための教師養成

では、どのような教員養成がこの地域でおこなわれているのか。Rifesser (2007:26)によれば、現在、この地域での教員養成をおこなっているのは、ボルツァーノ自由大学 (Freie Universität Bozen) 教育学部である。この学部では、小学校教員養成課程において、ドイツ語、イタリア語、ラディン語のいずれかから幼稚園と小学校で教育する言語を、大学入学時に選択することができる。ラディン語コースも用意されており、卒業論文を執筆することができる(ただし、講義はドイツ語かイタリア語のみ)。

卒業論文に関しては、小学校教員養成課程のものを2本、Rifesser氏のオフィスで見ることができた。1本はラディン語で書かれており、その教育法を具体的な方法を研究したものであった。また、もう1本はドイツ語で書かれ取り「南チロルのドイツ語ならびにイタリア語小中学校におけるラディン語地域歴史文化の有無 (Die (Nicht)Präsenz der ladinischen Geschichte und Kultur in den deutschen und italienischen Grund- und Mittelschulen Südtirols)」と題されたものであった。

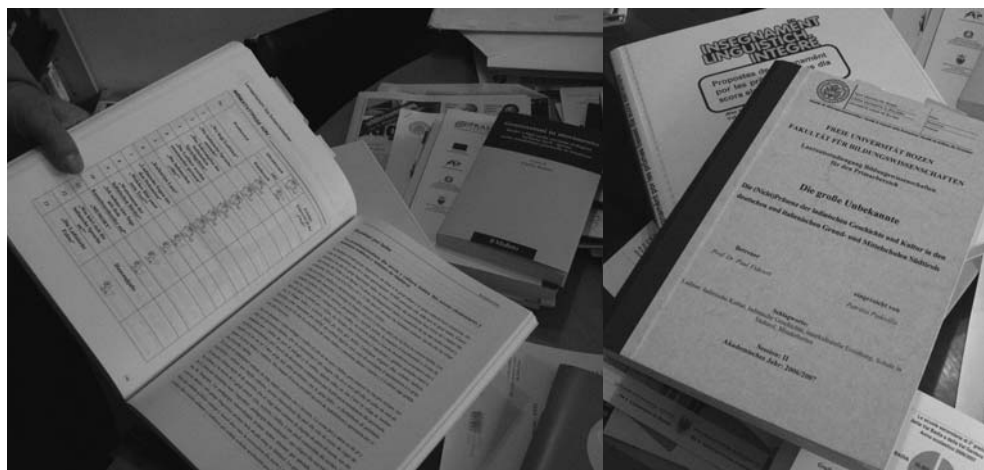


写真7 ドロミティラディン語に関するボルツァーノ自由大学の卒業論文

これらが、どのような内容をもった卒業論文であるのかは、短い時間で十分に窺うことはできなかったが、十分な分量と実証をおこなうに十分な具体例を含んだものという印象は強く受けた。また、Rifesser (p.c.) の評価も高いものであった。

卒業した学生たちは教員として各地で活躍することになるが、さらに、定期的な教員研修もおこなわれている。ラディン語教育研究所 (*la. Istitut Pedagogich Ladin, it. Istituto Pedagogico Ladino*) ほかが発行した2008/09の研修コース案内には、50あまりのコースが紹介されている。1回だけのコースから定期的なコースまで、また、地元開催のコースからはるばるローマやミュンヘンで開講されるコースまで、さまざまな需要に合わせて開講されている。使用言語は、ドイツ語が多いが、イタリア語やラディン語のコースもある。

その中に、ラディン語による教員研修メニューもある。K20.L1というコースでは、正書法や文法を含む言語学が教えられる。10月の毎週水曜日に5回、15時30分から2時間の開講である。このよう

な言語学的内容のコースが、もっとも多く時間が割かれおこなわれていることは、前稿(2008)で見たフリウリ語の場合と同様である。もちろん、それらを単なる知識として教えるわけではなく、その訓練方法までを含めて教えられている。一方、15.L1と記号の振られたコースでは、教員向けの呼吸法 (*la. esercizi de respiraziun*) や体操 (*la. esercizi fisics*) が、バディア溪谷のアル・プラン (Al Plan) という村で6回とガルデーナのセルヴァで7回開講されると書いてある。いずれも、主催はラディン語教育研究所である。



写真8 ラディン語教育研修
(Rifesser 2007:23より)

今回の調査では、このような実態まで直接調査をおこなうことはできなかったが、Rifesser (2007:23) には、Werner Carigiet教授による総合会話授業の研修が紹介されている。このようなことが可能となるのは、前節に示したような学校教育が午前中で基本的には終わり、午後には十分な時間が教師に与えられていることによる。公務員である教師の給料が安いことは、洋の東西を問わない実情であるが、そのような中にも向上心溢れる教師の研鑽の場が多くもお

けられていることは、これからの日本における大学のあり方も含めて、参考となる事例である。

3.5 ドロミティラディン語の将来

前稿(2008)で考察したフリウリ語と異なる点は、この山の民の言語は、かつて一度も自分たちの国家をもたなかったという点である。歴史上、常に少数言語であり続け、さらには、次に見るスイスのロマンシュ語のように国家の公用語ともなり得なかった。さらに話者人口としても極めて少ない。これらのことから考えると、将来も極めて悲観的に考えがちであるが、逆の見方もできる。それは、これまで国家に頼らず言語を保ってきたのであるから、これからも保っていけるであろうという楽観的な考え方である。

どちらが正しいのか、それは、歴史しか検証し得ないことである。しかしながら、西ドロミティで話を伺った人々の表情は決して暗いものではなかった。それは、この地が自然環境やスキーなどのスポーツ施設という点から見て、きわめて恵まれた土地であるということもあるかもしれない。出生率も低くなく、児童生徒数も少子化の影響を受けているというデータは上がってきていない。最近では、ロシアの金持ちが大金を落としていくという話も聞いた。それだけ仕事自体はあるのである。

フリウリとの比較は一概にできないが、フリウリ-ヴェネツィアジューリア州の州都であるウディネの町でイタリア語しか耳にしなかったことと比べ、当該地域ではまだラディン語を耳にする。そして、何より言語保持の体制が強固であるという印象も強く受けた。ラディン語教育研究所による啓蒙活動もさることながら、ガルデーナ地区およびバディア溪谷には、Micurà de Rüというセンターがきちんと機能しており、人々の表情も明るかった。

一方、今回、あまり報告できなかったが、ヴェネト州のほうでは、ボルカ・ディ・カドーレのセンターも十分に機能しているとは言い難い実情も目にした。最後は、住民自身の意識であるとはありきたりな結論かもしれないが、そうでしかないのも事実である。ボルカ・ディ・カドーレでコルティーナ・ダンペッツォ行きのバスを待つ間、ひとりの中年女性に話を聞くことができた。「もう遅すぎるんじゃないの？」彼女のことは、今でも耳に残っている。

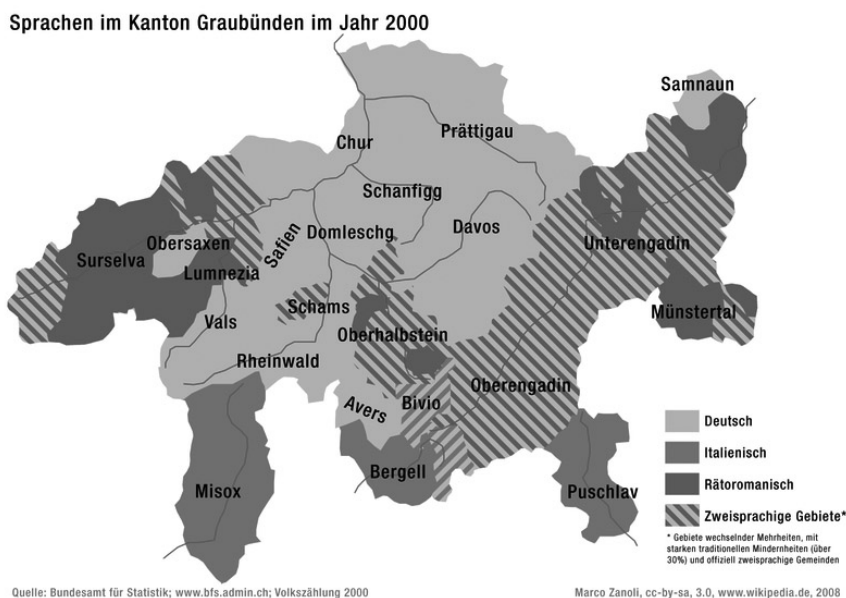
4. ロマンシュ語の現状と教育

4.1 ロマンシュ語の地理的問題

ドロミティラディン語と同様、スイスのロマンシュ語も、山に阻まれていることにより、その言語的な違いも小さくないものとなっている。

この言語も、州都クール (de. Chur, ru. Cuir) においては、すでにドイツ語になってしまっており、中心となるべき町のないまま、いくつかの地域に分かれて言語が存在している。

クールも通るライン川本流フォーダーライン川 (Vorderrhein) 流域地区がスルシルヴァ (Sursilva: 森上の意味) 方言地区である。一方、ヒンターライン川 (Hinterrhein) 沿いにはストシルヴァ (Sutsilva: 森下の意味) 方言地区がある。さらにヒンターライン川から分かれたアルブラ川



http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/f/fe/Sprachen_GR_2000.pngより

地図3 グラウビュンデン州におけるロマンシュ語方言の分布

(Albula) 流域とその南のギュリア川 (Gügli) 川流域, 地図でOberhalbsteinとあるあたりのスルミラン (Surmiran) 方言地区は、クールとサン・モリッツ (St. Moritz) を結ぶ主要街道の周囲に点在する村が主体である。大きな言語域となっているのが、オーストリアへと続いていくイン川流域に広がるエンガディン (de. Engadine) 谷である。ここは、上流(地図でBergellと書いてあるところはイタリア語地区で、その地域とOberengadinと書いてある地域との間に峠がある) が上エンガディン (de. Oberengadin, ru. Engiadin' Ota) 地区, 下流が下エンガディン (de. Unterengadin, ru. Engiadina Bassa) である。順に、プテール (Puter) とヴァッラーデル (Vallader) と呼ばれる方言を話している (Valladerは、山を越えたミュスタイル (Müstair) 谷でも話されている)。やはりドイツ語に分断され浸食されている状況である。

4.2 ロマンシュ語の現状

ロマンシュ語とは、スイス最西端の州グラウビュンデン州で話されている上記5方言の総称である。グラウビュンデン州での統計によると、1880年にロマンシュ語を母語とする人の割合は、州全体のおよそ4割であったとされる。現在では、母語 (native language) という統計の取り方はされず、択一の「もっともうまく操れる言語 (best command=BC)」と、複数回答可能な「通常よく使う言語 (MS)」で取られているが、2000年度の調査では、BCとMS合わせて2割強ほどである。やはり急減と言わざるを得ない。なお、スイス全体では、2000年度の調査で、BC+MS=0.8%である。この母語率とも言える数字も、谷ごとで大きな差があり、もっとも高いロマンシュ語使用が観察されるVallader地区で79.2%, もっとも低いSutsilvan地区で15.4%と差が大きい。当然、ここには、同じ方言として重要な価値を持ちながら、この言語内でも格差が生じてしまう危険性が含まれている。

ロマンシュ語の危機的現状は、人口規模だけではない。このような地区が、エンガディンの谷はつ

ながっているとはいえ、分断されて存在していることも危機を助長している。このような分断は、共通語の成立が阻まれることを意味しており、それによって一つの言語（方言）としてのまとまりがより小さくなる。その分断している言語は、ドイツ語である。Lia Rumantscha (2004:37) には、「しのびよるドイツ語からの脅威 (Creeping Germanisation is indeed a threat for the Romansh community)」が書かれている。

このようなドイツ語との関係性を含め、Lia Rumantscha (2004:36) は、ロマンシュ語衰退の理由を次のように記述する。

- ・経済・文化的中心地の欠如
- ・地域的限定性（外国などに同一言語を話す地域をもたないこと）
- ・スイス国内でのドイツ語圏への経済的依存
- ・マスコミにおけるドイツ語の優位
- ・公的場面や私企業におけるロマンシュ語の不当な扱い
- ・書きことばにおけるロマンシュ語自体の言語的分化
- ・ロマンシュ語共通語の欠如

上記の要因には、解決に向かおうとしているものもあるが、やはりドイツ語による分断やドイツ語に対する劣勢がロマンシュ語衰退の大きな原因となっていることは否めない。

ドイツ語を用いることの第一の意味は、経済である。スイスは、世界随一とも言える観光地であり、その山河は存在するだけで価値を生む。イタリア側からこのエンガディンの谷に入るのに、もっともメジャーな経路の一つが、地図でPuschlavと書いてある谷の先にあるティラーノ (Tirano) という町から入る方法である。ここからは、サン・モリッツやクールへとベルニナ急行が走っている。さらには、スルシルヴァの谷を通して、峠を越え、マッターホルン (Matterhorn) へと長旅ができる氷河急行もある。眼前に氷河が迫り、夏でも雪を湛えた頂を観光客に見せてくれるのは、多く、このロマンシュ語が話されている地域なのである。エンガディンの谷は、また全体として保養地としての開発も進められている。下エンガディンの中心地、電車の終点でもあるシュクオル (Scuol) にも、大きな温泉施設が作られている。観光価値を高めているのが田舎らしい自然であるとするならば、ここに、構造的な言語変化の仕組みが潜んでいると言わざるを得ない。つまり、ロマンシュ語を話す地域こそ観光地化すべき所であり、そのことにより言語は、どんどんとドイツ語へと置き換わっていくことになる。構造的に、貧しくても言語・文化を保全するか、ドイツ語を習得することで経済的な豊かさを手に入れるかという選択を迫ることである。

ドイツ語との関係をもう少し見ておこう。



写真9 州都Churにおけるドイツ語の優位
公共機関の表示は独語、伊語、ロマンシュ語(左)
通りの名前はドイツ語のみが多い(右)

確かに、町の中を見てみると、ドイツ語の表示は圧倒的に多い。公的機関は、州都クールにおいてもドイツ語のみのところがまだ少なくない。特に、通り名はドイツ語だけで表示されているが、実際の郵便物等には、それぞれの言語の通り名を用いることがあり混乱を来している。たとえば、ロマンシュ語研究センターLia Rumantschaは、Via da la Plessur 47という番地にあるが、それが、上に掲載した写真のObere Plessurstrasseと同じであるとは、Obereが付加されていることもあって、わかりにくい。

一方で、新しい看板では、写真9左のように、ドイツ語がもっとも大きく書かれてはいるがイタリア語とロマンシュ語を併記するものも増えてきているようである。写真10のようなロマンシュ語による表示が独立して見えるような工夫がなされているものもある。



写真10 州都Churにおけるロマンシュ語表示
クール駅裏の健康社会研修センター (左)とレティッシェバーン(右)

特に、ロマンシュ語圏であるエンガディンの谷においては、かなりロマンシュ語による表示を見ることができる。上記の鉄道レティッシェバーンも、エンガディンの谷とスルセルヴァ地区では、それぞれの方言での車内放送をおこなう。このような公的場面での使用、特に書きことばとして目撃することは、ロマンシュ語話者に、公的言語としての自負心を植えつけていると言えるであろう(日本で、方言がまだまだ「なまり」でしかないのは、このような書きことば性の欠如が顕著であることが一因である)。

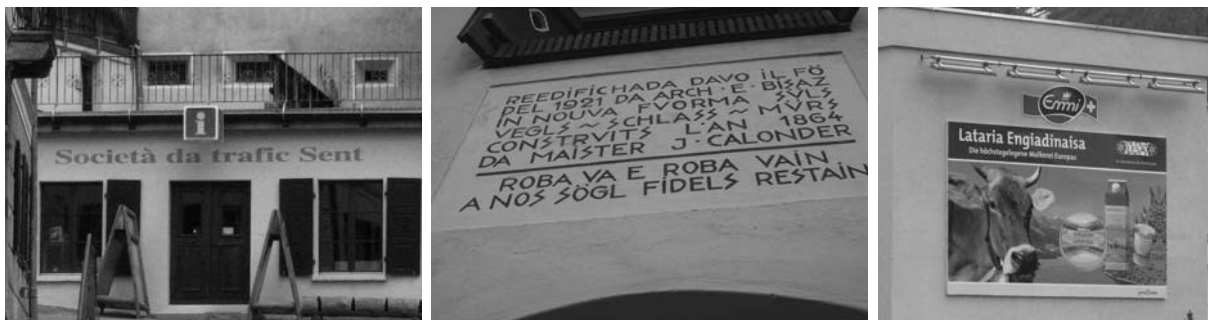


写真11 エンガディン谷における書きことばとしてのロマンシュ語
Sentの町の交通局(左)、同 家の外壁のこぼ(中)、Samedan近郊の生乳工場の看板(右)

書きことばとしての性質の問題点はいくつかあるが、最大の問題点は通用する範囲の限定性である。たとえば、公的機関がどれかひとつの言語による表示をおこなうことは、その言語を用いない人にとっての近づきやすさを保障しない。たえほとんど観光客の来ない小さな村であっても、交通局がロマンシュ語だけで書いてあると困る人もいるかもしれない。もちろん、この程度であればイタリア語の知識なりで間に合わせて理解することも可能であるが、Bognという看板が「温泉」であることは、(イタリア語のbagno「お風呂」という知識を持っていたとしても)即座には理解しにくい。書きことばは、併置がそれほど困難ではないが、同時に、目立たせたいなどの意図があったり、特定の人向

けのものであったりする場合、やはり排他性を有することも忘れてはいけない。

もうひとつ、書きことばの限定性は、特に方言バリエーションの多いロマンシュ語では大きな問題となる。ロマンシュ語言語センターであるLia Rumantschaにおける学校教科書の問題は後述するが、その根底にあるのが、このような地域ごとの言語変異体の多さである。顕著な例として、この地方では、家に表札代わりに「〇〇の家」に相当することばを書く風習がある。この「家」は、イタリア語で言えばcasaであり、このcaの音は、ロマンシュ語においては口蓋化する。そのため、各地のこのcasaに相当することばを見ていくと、おおまかなことばの違いを実感することになる。次の写真は、州内各地の家の写真であるが、casa, chesa, tgiasa, tgesa, tgaなどさまざまな表示が見られる。



写真12 ロマンシュ語による家の「表札」の多様性
SurselvaのTrun(上左), Engiadin'OtaのSamedan近郊(上中),
Surmeirの小さな村で(上右・下3枚)

このような多様性は、単にひとつの「ロマンシュ語」を守ればよいのではないことを物語っている。スイスのロマンシュ語に関する保護運動は、上述のように戦前から始まっている。富盛(1984:64)によれば、1938年2月の国民投票によりスイス連邦憲法第百十六条を改正して、第四番目の国語として後任されたとあるから、80年前である。それからロマンシュ語が、(確かに命脈を保っていること自体、注目すべきことではあるが)やはり衰退の一途をたどっていることは、言語政策の問題も小さくないことを物語っている。

ひとつには、上記のような谷ごと、また村ごとの違いが大きいことが挙げられる。言語的差異の大きさは、ちょうど明治期の日本語のように、国家的発展の妨げとなる。一方で、共通語が自分たちの

日常言語から乖離していれば、その共通語によほどの威厳 (prestige) がない限り、自らのものとして取り入れていくことをしないであろう。この問題に関しては、次節で、教育と関連づけてもう一度考える。

このようなロマンシュ語自体の衰退は、ドイツ語による浸食ともあいまって、現在も進行中である。

最後にマスコミにおける言語使用について述べておきたい。

クールで視聴できるテレビ放送は、地上波で、おおよそ日本の都市部と同じ程度である。しかし、大きく異なるのは、使用されている言語がドイツ語、フランス語、イタリア語とさまざまである点である。ドイツ語では、ローカルニュースも充実していて、州議会開催中だったためか、多くの時間が州議会の議事に割かれていた。そこでは、興味深いことに、ドイツ語の他、ロマンシュ語やイタリア語でインタビューに答える議員の姿も見られた。しかし、総じて見ればやはりドイツ語が主体であり、ドイツ語が理解できなければ、州議会で話し合われたことすら理解できない。

ロマンシュ語の放送はないかという点、実際におこなわれている。右は、ロマンシュ語放送をおこなっているRTR (Radio e Televisiun Rumantscha) 社屋にて、案内してくれた職員のGuadench Dazzi氏を写したものであるが、その横の館内案内を見ると、規模の大きさがよくわかる。RTRは、日本の地方にあるようなラジオ・テレビ局に優とも劣らない設備を備える (年報Rapport annual CRR e RTR 2007によると年間予算は2400万スイスフラン (訪問当時1CHF=100円))。ラジオ放送は、1日20時間を放送するが、しかしながら、テレビ放送は、一日にたったの平均15分間である。テレビニュースは新規収録の放送が各5分の1日2回。その再放送も放送されている。ほかに、Cuntrasts (議論とでも訳せるだろう) とIstorgia (話) と題された番組も週1回、放送されている。当然、自前の電波は持たず、SFやTS1といったドイツ語ならびにイタリア語放送に間借りする形で放送をおこなっている。それでも視聴率は非常によく、同局年報による視聴者数は、ニュースの50,000人 (全ロマンシュ語話者数は60,000人であるから、数字が正しければ8割強の人が見ていることになる)、特に40代男性を中心によく見られている。特に、視聴者の半数以上が、Churおよび近郊在住者と、故郷を離れ州都Churで働く人たちにもよく見られている。



写真13 RTR (Radio e Televisiun Rumantscha)

では、このRTRの放送は、ロマンシュ語話者にとって、どのような意味を持っているのであろうか。インタビューに答えてくれたGuadench Dazzi氏は、それでもロマンシュ語圏からの反響は小さくないと誇らしげに語ってくれた。この放送がロマンシュ語話者の心のよりどころになっているとの話も事実である。しかも、国外での視聴者も少なくなく、インターネットでのストリーミング放送には、世界中からのアクセスもあるということであった。しかしながら、同氏は、RTRが何らかの言語推奨活動に加わることは反対の立場であり、ロマンシュ語の放送局でありながらも、ジャーナリスティックな立場を貫きたいと語った。この意見が、多くのロマンシュ語圏出身のジャーナリストの代表的な意見かどうかはわからないが、ロマンシュ語が、少数民族の言語であると気負うのではなく、ふつうの一言語として存在していきたいとの意識が垣間見えた点では、非常に興味深い意見であった。

4.3 ロマンシュ語の教育

続いてロマンシュ語の教育について見ていく。

ロマンシュ語教育の基本となる言語政策には、Lia Rumantschaも大きく関与している。Lia Rumantschaは、1919年に「ロマンシュ語を話す地域に対するドイツ語化の脅威から逃れるために出来る努力をおこない共に闘うこと (to channel all available efforts and to fight together to prevent the threatened erosion (i.e. Germanisation) of the Romansh-speaking territory) (Lia Rumantscha 2004:7)」を目的に設立された言語・文化推進機関で、さまざまなロマンシュ語の辞書や教科書も出版しており、また、図書館も基本的文献から実際に学校教育でも使われる教科書まで、豊富に揃えている。

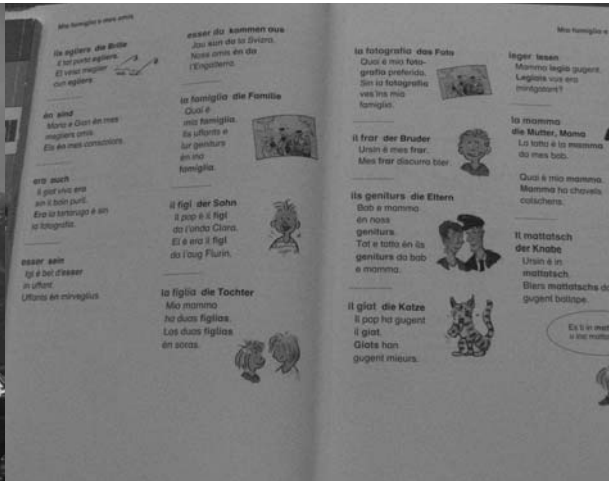
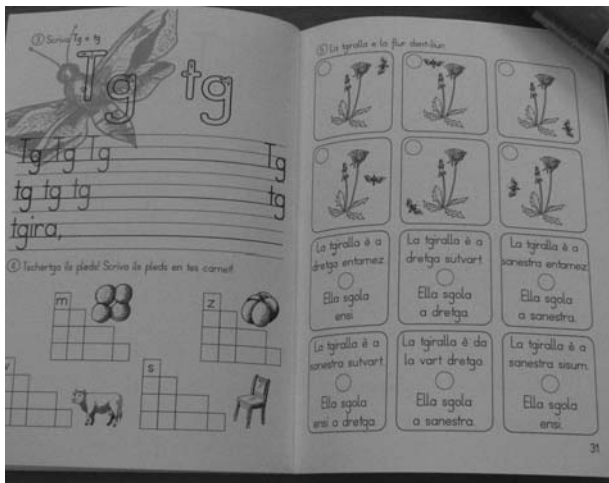


写真14 Lia Rumantscha本部 (上)
写真15 ロマンシュ語の教科書 (右上)
写真16 同練習帳 (下)



教科書の一例を挙げると、右上のような教科書“Vocabulari per la scola primara Rumantsch”では、単語が楽しく学べる工夫がしてあるが、見逃してはならないのは、すべてドイツ語の訳が付いている点である。すべての言語用教科書をつぶさに調べることはできなかったが、言語教育については、ロマンシュ語を母語としない人も学べ、また、ロマンシュ語を母語とする人が他言語併用という将来的な状況に直面したときに困らないような配慮がなされている。また、写真16のような小学校用の練習帳もあった。ロマンシュ語特有のtg (日本語のチャの子音に相当) の練習と、その文字連続を含む単語の練習、さらなる他の語の練習と、そのことばを用いた文を読む練習がなされている。常に単語を意識した綴り練習がなされている。

実は、この教科書は、同センターが作成している1つの言語のものでしかない。先にも述べたが、ロマンシュ語には少なく見ても4つの方言が存在する。さらに、1982年にチューリッヒのロマンス語学者Heinrich SchmidとLia Rumantschaによる共同提言された標準語であるRumantsch Grischun (=RG) 版も作られている。同じ教科書が、ある時代まで4つの方言版で作られていたことは驚くべきことである (次ページ左の写真では、上段にピュテール方言、下段にはストシルヴァン方言、スルミラン方言、そしてRGによる教科書が見える。また、右の写真は、それまでの4方言による5年生の算数の教科書)。教科書が個人に配布される日本では、毎年子どもの数だけ教科書が印刷されるが、



写真17 4方言とRGによる教科書

ヨーロッパでは教科書が高価なものであることもあり必ずしも教科書は個人のもとならないことがある。すなわち、印刷数は、話者人口の少なさもあって極めて少なく、それだけでも採算が取れるような事業でないことがわかる。教科書の制作自体が、社会的意義のある事業なのである。

しかし、このような方言の存在と標準語の不在がロマンス語の力を分散してきたことも否めない。RGは、このような6万人の話者の力の結集を呼びかけるものである。その制定方法は、4つの方言で多数を占める形を採用するというやり方採っている。たとえば、Lia Rumantscha (2004:92)によると、有力なスルシルヴァン、スルミラン、ヴァッラーデル方言で、すべてが一致すれば（他の方言で違いがあっても）それをRGに採用する。スルシルヴァン方言でsempel, スルミラン方言とヴァッラーデル方言でsimpelというように違いがあれば、多数決で決める。一人称の代名詞のように各方言で違いがある場合には、他の方言を参考にしながら理想型を制定するというやり方である。

標準語が必要であることは、日本でも明治の近代化の時代を考えれば自明である。一方で、標準語が人々の日常のことばからかけ離れていけば、その実効性が疑われる。しかし、日本語では、書きことばとしての標準語をまず推進し、全国である程度のコミュニケーションを可能とした。もちろん、そこには知識階層の文語の存在があったからこそではあるが、話しことばと必ずしも一致していなくとも標準語が共有されるものになっていくことは参考となろう。RGは、新聞や公的機関の発行物等で用いられている一方で、いまだ、4方言による書きことばも見られる。このような過渡期がいつまでも続けば、RGはその存在意義を失っていく。現在、教育現場でRGへの切り替えが進んでいるが、同時に、これに抗って地域言語を守ろうとする動きも見られる。教育を通じて、どのような言語の未来を描いていくのか。もう少し見守っていく必要がある。

Lia Rumantschaは、州内の言語教育に関しても関心を持って報告をおこなっている。Lia Rumantscha (2004:49ff)によると、グラウビュンデン州の教育は、小学校における教育言語に関して次のような分類がなされている。

まず、もっとも多くロマンス語を用いるRMタイプの学校で、208あるグラウビュンデン州のコミュニティのうち、78のコミュニティで採用されている。このタイプの学校では、幼稚園から小学校3年生まではロマンス語のみを使って教育がおこなわれる。しかしながら、ドイツ語をまったく使わないかと言うとそうではなく、この期間にドイツ語を言語として教える学校もある。その後、小学

校4年生から6年生までは、ロマンシュ語主体に教育がおこなわれ、中学校に入るとロマンシュ語とドイツ語が半々になるというやりかたである。

17の学校では、ドイツ語での教育がおこなわれるが、一週間に2時間から5時間、ロマンシュ語の授業がおこなわれるというやり方がなされている。

いずれにしても、どのようなロマンシュ語コミュニティに暮らしていようと、ロマンシュ語だけで高等教育を受けることは不可能である。ドイツ語は、この州で生きていくためには必須言語であり、これを無視してロマンシュ語のみで教育を受けることはできないのである。

なお、州内のロマンシュ語教育に関しては、グラウビュンデン州言語推進室 (Promoziun da linguas chantun Grischun) も調査研究を通じてさまざまな提言をおこなっている。同室のBarbara Strebel(p.c.)によると、グラウビュンデン州には、ドイツ語といても、主にクール北東ラントクヴァルト (Landquart) から山あいに入ったプレッティガウ (Prättigau) 地区では、一般的なスイスドイツ語ではなく、遠くヴァリス (Wallis) 州から移住してきた人によって話される方言が話されており、こちらのドイツ語の保護もおこなっているとのことであった。

ロマンシュ語の教育に関しては、小学校2校と高校1校を訪問し見学することができた。下エンガディン地区にあるシュクオル (Scuol) の小中学校 (スイスでは、大都市は別にして、小さな村では、学校に名前は無い。なお、Scuolという町の名前自体、「学校」という意味である) を、2008年6月4日に訪問した。



写真18 シュクオルの小学校

対応してくれたのは、おもに高学年のロマンシュ語およびフランス語を教えるMariachatrina Gisep Hofmann氏である。小学校であっても教科担任制で、さらに児童の方が先生の部屋に来るという方式でおこなわれているため、同じ部屋で2つの異なる学年の授業を見ることができた。

最初に伺った時間は、ちょうど小学校3年生の授業中で、十分に観察する余裕はなく、こちらからの自己紹介をおこなった程度であった。ただ、こちらは、イタリア語で自己紹介をおこなったがおおよそ理解されていた様子であった。

もう1つの授業は、日本で言えば中学校3年生に当たる9年生の授業で、自分の好きな音楽

を聴かせて、その音楽についてロマンシュ語でよいところを発表し友だちに聞いてもらうという口頭表現の授業であった。生徒数は、十数名であり、この時間は、3名が発表者となった。聴かせる曲は今回すべて英語の曲で、ドイツ語の曲は一曲もなかった。一足飛びに英語へと子どもたちの世界は広がっていているかのようであった。

授業の合間に、簡単な質問をしたが、中学校卒業までにドイツ語、イタリア語という州の公用語に加え、スイス連邦の公用語であるフランス語と英語まで話すようになるとのことであった。もちろん、同じ印欧語としての類似点がある上、すべてがどのレベルで話せるのかは個人差があるが、少数言語話者ならずともスイスで生きていくには、これくらい必要であるとの考えが垣間見られた。残念ながら、すべての時間割を把握することはできなかったが、語学の授業が多いのは、ドロミティの事例と類似するのであろう。

小中学校については、シュクオルの隣町セント (Sent) の学校を、6月6日に訪問することができた。

セントはシュクオルからわずかバスで数分であるが、ひとつの独立した村を形成している。スイスでは、村が教育体制から教育内容までの決定権を持つ。そのため、シュクオルの小学校そこにある小学校は、児童数が少ないため複式学級となっている。見せてもらうことができた学級は、5年生と6年生の複式クラスと1年生と2年生のクラスであった。

複式学級になっている理由は、生徒数が少ないことが原因である。もとより、バスで数分の距離により大きな村がある。日本であれば、近隣の学校との合併を推進するであろうが、ここでは一つの学校を運営している。それは、スイスでは、コミュニティに学校運営に関するすべての権限があり、より大きな自治体による学校統合は日本ほどたやすくおこなわれなためである。イタリア、ドロミティが州法によって学校の授業時間まで一律に決めているのに対し、スイスではコミュニティに大きな権限がゆだねられており、どの言語でどのような授業をおこなうかはコミュニティが決めることになっている。このことは、ロマンシュ語による教育をコミュニティごとに自由におこなえることを示しているが、実は諸刃の剣で、コミュニティの住民がより経済的に優位にあるドイツ語を選択すれば、一気にドイツ語での教育へと舵が切られてしまう。その可能性は、ドイツ系住民が増えることで実現することもある。この場合、従来からの住民の意向が無視されてしまうことにもなりかねない。また、住民間の世代差も問題になる可能性もある。



写真19 セントの5・6年生クラス



5・6年生クラスでは、数学の授業がおこなわれていた。先生はすべてロマンシュ語で話し、生徒もロマンシュ語のみで話す。ただし、週のうち5時間はドイツ語で授業をおこなうとのことであった。

授業内容は、数の大小を不等号で示すというもので、5年生向けに話をしたら5年生にプリントをやらせておいて、その間に6年生向けの授業をおこなうというやり方をしていた。

教室には、ロマンシュ語の綴り字に関する表示の工夫がなされていた。母音の開合の違いのある per (のために) と pèr (梨) の違いや発音を間違えやすい sch と s-ch (1・2年生クラス) など、普段から迷うことを教室に掲示して示すのは、日本と同じであるが、これらは、わずか6万人の話者を持つ少数言語の正書法である。覚えることがどのような意味を持つのか。その点に関して問うと、「私たちの言語だから」という答えが返ってきた。話者人口は言語の価値に関係がないことを再認識させられた。



写真20 セントの学校の教室掲示

一方、低学年クラスでは、先生も話せはするがイタリア語は得意でなく、また、イタリア語を十分に理解する児童は少なく、一人、イタリア南部カラブリア (Calabria) 州からの移民の子がいたので通訳をしてくれた。やはり、ここは、イタリア南部よりも仕事があるということで移住してきたのだという。

低学年クラスでは、カルタのような遊びを通じて算数を教えていた。耳で聞く分には、イタリア語の知識で十分に理解できるのがロマンシュ語の数である。しかし、やはりこのクラスでも文字言語との結びつけはやはり子どもたちにとって難敵であるようである。

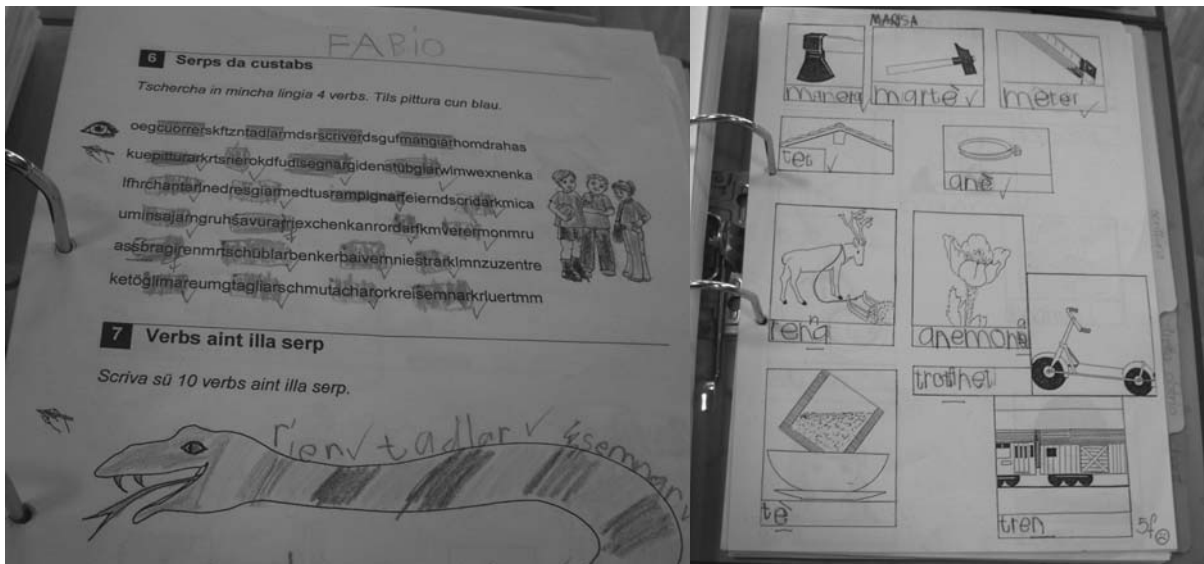


写真21 セントの1・2年生クラスのノート

写真は、イタリアからの移民のFabio君のノートであるが、どうしてもイタリア語との混同が見られる。花のアネモネは、イタリア語ではanemoneであるがロマンシュ語ではanemonaであり、朱が入れている。また、アクセント記号の有無も問題となっている。

2年生には、もうひとりドイツからの移民の子もいた。たった2人というわけではない。一学年10人のうちの2人がロマンシュ語母語話者ではないのである。このような小さな村でさえこのような状況であるのであるから、大きな町になればロマンシュ語を母語としない子も少なくないのは容易に予想ができる。コミュニティに教育する言語を含め大きな権限のあるスイスであるからこそ、容易にドイツ語による教育へと梶が切られる可能性も残している。その予兆が見えたクラスであった。

さて、高等教育ではどのような教育がおこなわれているのであろうか。有名な言語学者でもあり元 Lia Rumantscha代表でもあるChasper Pult氏の授業を州立高校⁴ (Bündner Kantonsschule) で見ることができた。

⁴ 実際には高専のような年齢の学生の通う学校 (scuola media superiore grande e moderna comprendente ginnasio/liceo, scuola media propedeutica e scuola media commerciale) である。

高校生は、必ずしも母語話者というわけではなく、選択によってロマンシュ語の授業を取っている。主にドイツ語を母語とする学生たちが、日本の第二外国語を学ぶようにロマンシュ語を学んでいるのである。内容は、地理的な話で学問的な部分が多く、特に語学学習という側面は見られなかった。話すことを目的としてドイツ語話者にロマンシュ語を高校生に教えるということは、やはり考えにくいことである。



写真22 グraubünden州立学校での
成人向けロマンシュ語講座

しかしながら、一方で、成人教育には、ドイツ語を母語とする人も少なからず参加していた。写真は、Chasper Pult氏が州立高校の教室で夕方開いている成人向けロマンシュ語教室である。内容は文学作品を読むというもので、詩を朗読し意味を考えると、短い授業である。参加者は写真に見えるとおりの数名であるが、このような地道な活動は各所で続いており、また夏期講習なども開催されている。

母語話者以外にロマンシュ語に関心を持つことの意義は大きい。Catrina (1989:173) が述べるように、「大半のスイス人はレトロマンシュ語に共感を抱くが、スルシルヴァのこぼとハンガリー語

の区別すらつかない」のが実情である。これを、少しでも変えるためには地道な努力が必要である。

人間の欲に任せれば言語が常に経済力のある方へと伸びていく。これに対し少数言語に関心を持つことは、余裕がなければできないことであり、それこそ人間の理性がなす技である。自らが住む土地に別の言語が存在し、その言語を学ぶことを通じて違いと同じであることを学んでいく。この機会には日本にもある。そのことをも考えさせられる成人向けロマンシュ語講座であった。

4.4 ロマンシュ語の未来

Lia Rumantscha (2004:36) に指摘された問題点に対する解決策も、同書には示されている。そこには、スイス連邦レベルでの言語的地位の向上や予算確保ということの他に、教育に関して、ロマンシュ語教育の広範囲化と時間増が記されている。しかしながら、その具体的方法は書かれておらず、また実際に見た限りの感想としても、これ以上の時間増は難しい。他の教科を犠牲にしないでロマンシュ語の時間を増やすのは、午後にも授業をおこなわない限り無理であろう。

富盛 (1984:65) には、ロマンシュ語再生への十年計画の提案が紹介されている。そこには、①憲法改正によるロマンシュ語の連邦レベルでの公用語化、②ロマンシュ語の使用地域の人為的保全、③中等教育でのロマンシュ語教育必修化と高等教育での充実、④ロマンシュ語専用放送局の創設という4点が挙げられている。出典は明記されていないが、この提案から四半世紀後の実態を見ると、状況は好転したとは言えない。2002年に改正されたスイス連邦憲法70条においても、連邦レベルでの公用語は独仏伊の3言語であり、ロマンシュ語は、ロマンシュ語を話す人々とのコミュニケーションのための公的言語 (official language for communicating with persons of Romansh language) という位置付けに留まっている。ただ、同第5項には、Graubünden州とティチーノ州でのロマンシュ語およびイタリア語の保持推進に連邦レベルでの支援をおこなう旨も書かれている。法律で決まったから情勢が一気に好転するわけではないことは洋の東西を問わないが、少しはよくなる期待は持てるかもしれない。また、④についても、前述のロマンシュ語放送をおこなうRTRがテレビ放送としても充実していく可能性は残っている。しかしながら、残りの②と④は、自由主義国家であれば逆に難しいであろう。

Catrina (1989:60) には、次のような逸話が紹介されている。クールのライン地区に住むスルシルヴァ地方出身の主婦が、子どもに対してロマンシュ語で話をしていたら、「ロマンシュ語で話すのはやめよう」と息子に言われた。その理由を尋ねると、息子は「ここじゃ皆ドイツ語を話すから」と答えた。ロマンシュ語を恥ずかしく思っているのがわかったという話である。また、別の主婦は、次男が学校で問題を抱えていることがわかり、家庭でのロマンシュ語使用を後悔したという話も紹介されている。Barbla Etter (p.c.) によると、このような状況は20年後の現在、ほとんどないとのことである。それは、Lia Rumantschaの地道な努力だけでなく、EU圏内（スイスは非加盟）の少数言語保護政策が、（グローバル化する世界に対するEUの賢明な措置として）執られてきたことも関係している。日本でも、一時期は、まさに国語教育の誤った加担もあって、方言は悪いものとの教育がおこな

われてきたが、今やそのような考えは過去のものになりつつある。今回の調査においても、ロマンシュ語話者が自らの言語を卑下する場面はまったく見られなかった。このことは、将来への明るい展望と受け止めることができるであろう。



写真23 サンモリッツ駅のロマンシュ語による「ようこそ」(左)とスイス国際航空の機体のロマンシュ語(下)



エンガディンの谷の観光地、サンモリッツの駅で左上のような看板を見かけた。裏面には、ドイツ語、英語、イタリア語、日本語、韓国語、中国語がある中で、この写真の面には、フランス語、オランダ語、スペイン語とまじって、スイスの国旗の後にロマンシュ語の「ようこそ」である“Bainvegni”が記されていた。あるわけのない「スイス語」として、紙幣にも、そしてスイス国際航空の機体にも描かれている(写真右上)4番目の言語が、消去法的に選ばれたとはいえ、スイスの顔となっていることは皮肉的ではある。そして、同時にまた希望でもある。

5. 少数言語教育と日本の方言教育

日本の方言調査でも、「その土地のはえぬき話者」の語彙や音声を調べるということが、かつておこなわれていた。そのような調査は、方言調査の限界が叫ばれてきた昭和後期に、事実としても終焉を迎えた。平成も20年経った今、そのようなはえぬき話者を捜して調査をおこなうこと自体が困難となっている上、また、はえぬき話者を見つけたとしても、その話されていることばまで「はえぬき」の土地のことばであるとは言えない状況になっている。つまり、その意味では、伝統的な方言の死滅は火を見るより明らかであり、それを追い求めることは、タイムマシーンでもないかぎり不可能である。

ある言語に他の言語はどのようにして入り込むのであろうか。例として、Catrina (1989:172) には、

Che per üna flur?という言い方が紹介されている。本来、ロマンシュ語でChe flur? (*lit.* What flower?) というべきところを、ドイツ語の表現法を翻訳借用する形でChe per üna flur (*lit.* What for a flower?) と言っているのである。これは、日本語のネオ方言や新方言と呼ばれているものとも近い。一方、本来、Mercurioの日と言っていたであろう水曜日のように、すでにドイツ語からの影響で、mesemna (週の中日) というような言い方でロマンシュ語に定着した語もある。筆者自身の身近な例で考えてみれば、末娘から見て、長兄は「兄ちゃん」であるが、他の兄とまとめて呼ぶときには「兄ちゃんズ」と言っていることなど、文法的装置のある言語に移入するような現象は、珍しくない。一律には進まないであろう、このような移入現象を、位相と絡めた研究がもっと個別に進み、言語を越えた一般化がなされることが期待される。

日本の事例に戻るが、方言がなくなったかと言えばそうでないことも事実である。特に昨今では、逆に方言を個性として売り出すこともおこなわれている。その一方で、井上史雄 (2009) に述べられるような、誤った方言でもイメージ優先で使われている例も報告されている。このようなイメージ先行でめちゃくちゃな方言が使われていけば、ことばと文化が乖離してしまう。レトロロマンス語 3 言語の調査を通じて痛感したのは、自らの個性としてことばを位置付け、その保全と使用促進に取り組む姿であった。このことから学ぶことは少なくない。

このような研究を踏まえ、言語継承を言語学的な側面から、より深く考えていくことも必要となってくるであろう。いくら方言を覚えていると言っても、すべてが次の世代に引き継がれていくわけではない。事実、筆者自身、地元の方言集を片手に父親に聞くと、自分自身聞き覚えのないことばがいくつも「昔は使った」と返ってくる。世代間の言語伝承効率というものがあるとしても、それが決して高くないことは、多くの言語変化に関する調査が物語っているとおりである。言語継承は学校教育によっておこなわれるものである。日本でも、方言を、経済力のある全国共通語と併存させる形で、どのように教育していったらよいかを真剣に考えるべき時に来ているのであろう。

言語の純粹さは、努力しなければ保持し得ない。日本のそれぞれの個人の抱く「母語」には、様々なものがあるであろう。しかし、一地方のことばを母語と感じその保持と使用促進を地域の連帯の下で探るのであれば、このような少数言語教育の様々な事例は有益なことをたくさん教えてくれる。

6. 終わりに

このレトロロマンス語との出会いは、大学受験の頃であった。富盛 (1984) の一般向け、わずか4ページのロマンシュ語の記述は、さまざまな言語への憧れを中学時代から抱き、高校1年生からスペイン語、フランス語などのロマンス語をNHKのテレビとラジオの講座ではあったが勉強してきた受験生を、即座に虜にした。ドイツ語の子音とロマンス語の母音を持つ言語をいつか研究してみたい。この思いを持って入学した大学では、残念ながら紆余曲折あって、なんとか卒業論文でロマンシュ語の形態音韻論のまねごとではできたものの、それ以上、ロマンシュ語の研究を続けることはかなわなかった。

それから、イタリアでの仕事をする機会を得てローマで暮らす内に、1992年だったか、一度、エンガディンの谷を訪れたが、本格的な調査ができるまででもなかった。それは、インターネットがまだ今ほどの情報を提供してくれる時代でもなかったために、アクセス方法が十分になかったことによる。時代は確実に変化している。

それからさらに16年。最初にロマンシュ語と出逢ってから25年、ようやく、ロマンシュ語と、その姉妹言語であるドロミティラディン語、ならびにフリウリ語の研究を、教育という点に重点を移しながらもおこなうことができた。個人的な思いをこのような論考に記載することは適当ではないかもしれないが、それだけの思いがこもった論文を書けたことは幸せなことである。

しかしながら、わずかな期間の調査で書かれた論文である。ドロミティラディン語に関しては、事前に情報収集をおこなっていたとは言え、ヴェネト州に関して1日、トレンティーノ・アルトアディ

ジェ州に関して2日の調査だけで、すべてが見通せたわけでないことは言うまでもない。フリウリ語を含め、むしろ、これから研究が始まると言わざるを得ない段階にある。

ロマンシュ語に関しても同様である。以前に関心のあった形態音韻論の研究は、今回の在外でお世話になったヴェネツィア大学図書館、また、インスブルック (Innsbruck) 大学にも豊富に見ることができた。外国で、ある国の研究をする場合、その紹介に留まってしまっただけでは真の研究にはなりえない。しかし、豊富な研究をすべて見通して新しいことを言うには、外国での研究は圧倒的に不利である。たとえば、外国人研究者が日本語研究において日本人研究者に優る論文を書こうとするならば、自らの言語との比較であれ何であれ、異なる視点を持たなければならない。そのような意味で、この研究は、ある方向性をもって行われなければならないであろう。

その「ある方向性」とは何か。それは、自国の少数言語教育との比較において、論じる道ではないかと考えている。とはいっても、レトロロマンス語の教育を研究することに引き合いに出せることは、アイヌ語のような系統の違う言語の教育を考えることとも少し違う。また、他に「本国」を持つようなオールドカマー・ニューカマーの言語教育を考えることも、また異なる。レトロロマンス語がイタリア語と同じ、ロマンス語の一言語であることを考えても、その言語学的な距離は遠近であろうが、比較すべきは、日本国内における同系統の言語、すなわち、日本で言えば方言なのであると考える。

方言を教えることは、かつて宮島 (1966) で論じられたような、方言を標準語の効果的教育という目的のために教えるという方向性から、今、異なる段階に来ている。忘れ去られていく母語・母文化の伝承という点からの方言教育は、外国人に対する大阪YWCA編 (1998) などから刺激を受け、より構造的でコミュニカティブなものへと発展しようとしている。このような段階での、ある共通語圏内における少数言語教育という点では、レトロロマンス語の教育に関する事例は参考になる。特に、教師教育という段階に関して、未だ、日本国内で方言を捉えている論文は数えるほどしかない。この点に応用していくことこそ、ひとつの道であると考えられる。

【付記】

本考察は、2008年3月31日から、2ヶ月間の岐阜大学在外研究を得て、イタリア・ヴェネツィア大学を拠点におこなわれた、イタリア北部に存在する異なる母語を持つ地域の母語教育の現状と課題に関する研究と、継続して私費にておこなわれたスイス・グラウビュンデン州言語調査の成果の一部である。

【謝辞】

本考察は、多くの人の協力無くしてはなし得なかった。

特にドロミティラディン語に関しては、ヴェネツィア大学外国語・外国文学学部東アジア学科講師の鈴木朱音さんにたいへんお世話になりました。また、Rut Bernardiさんを通じ、Micura de RüのLeander Moroderさん、Istitut Pedagogich LadinのTheodor Rifesserさんに貴重なお話を伺いました。

また、スイス国内ではLia RumantschaのBarbla Etterさん、Nicole Stiefenhoferさん、KantonschuleのChasper Pult教授ならびにPult教授への橋渡しをしてくださったOtmaro Lardiさん、RTRのGuadench Dazziさん、グラウビュンデン州言語推進室 (Promoziun da linguas chantun Grischun) のIvo Bertherさん、Barbara Strebelさん、Scuol村小学校のMariachatrina Gisep Hofmannさんをはじめ教員のみなさん、Sent村小学校のAndri Drittiさんをはじめ教員のみなさんには、たいへん助けて頂きました。

感謝のことばを述べたいと思います。

【参考文献】

- 井上史雄 (2009) 「ことばの散歩道128」『日本語学』明治書院Vol.28-1
- 大阪YWCA編『聞いておぼえる関西 (大阪) 弁入門』アルク
- 大澤麻里子・山川和彦・長谷川秀樹(2005)「第8章 イタリア」渋谷謙次郎編『欧州諸国の言語法 欧州統合と他言語主義』三元社
- 富盛伸夫 (1984) 「ロマンス語を話す人たち」『講談社世界の国シリーズ スイス・オランダ・ベルギー』講談社
- 宮島達夫 (1966) 「方言教育論」『言語生活』1966年1月号
- 山田敏弘 (2008) 「フリウリ語母語教育の現状と課題」『岐阜大学教育学部研究報告』57-1
- Belardi, Walter (2005) “Breve Storia della Lingua e della Letteratura Ladina 2a edizione aggiornata” Istituto Ladin “Micurà de Rù”, San Martin de Tor
- Belli, D. et al. eds. (2004) “Ladini Oggi” Istituto Ladin de la Dolomites, Borca di Cadore
- Catrina, Werner (1989) “I Retoromanci oggi, Grigioni-Dolomiti-Friuli,” Giampiero Casagrande Editore (原版は “Die Rätoromanen” (1983) Rinaldo Boldini訳)
- Eicher Clere (2004) ‘Storia dell’Identità Culturale e Linguistica Ladina Bellunese’ in Belli, D. et al. eds. (2004)
- Ellecosta, Lois ed. (2007), “La Scora Ladina”, Comitê Provinzial por l’Evaluziun dl sistem scolastich ladin - Istitut Pedagogich Ladin, Bolzano
- Gordon, Raymond G. Jr. ed. (2005) “Ethnologue Languages of the World – Fifteenth Edition” SIL International
- Guglielmi, Luigi (2004) ‘Senso, Significato, Attualità e Buone Pratiche di Promozione e Tutela della Lingua nella Minoranza Ladina,’ in Belli et al. eds. (2004)
- Lia Rumantscha ed. (2004) “ROMANSH : Facts and Figures”, Lia Rumantscha, Chur
- Lutz, Florentin (1982) “La Suisse aux Quatre Langues” Editions Zoe : Genève
- Majoni, Ernesto & Luigi Guglielmi (2005) “Ladinia Bellunese: Storia, Identità, Lingua, Cultura” Istituto Ladin de la Dolomites, Borca di Cadore
- Rifesser, Theodor (1994) “Un Tetto per Tre Lingue”, Istitut Pedagogich Ladin, Bolzano
- Rifesser, Theodor (2007) ‘Das ladinische Schulmodell’, Lois Ellecosta ed. “La Scora Ladina”, Istitut Pedagogich Ladin, Bolzano
- Siller-Runggaldier, Heidi (2000) ‘La lingua ladina. Riflessioni sociolinguistiche’, in Verra ed. (2000)
- Vera, Roland ed. (2000) “La minoranza ladina, Cultura, Lingua, Scuola” Istituto Pedagogico Ladino - Intendenza per la scuola della località ladine, Bolzano